

## ヨイタタンサケイカクの二年目

### Second Year of Mapmaking Project “Yoita Tansa Keikaku”

北 雄介

KITA Yusuke

キーワード：フィールドワーク、街歩き、地図づくり

Keywords：fieldwork, citywalk, mapmaking

#### 1. はじめに

筆者の研究室では2019年度より、長岡市与板町（以下「与板」）において「ヨイタタンサケイカク」というプロジェクト（以下「本PJ」）を進めている。与板でのフィールドワークを通じ、さまざまなテーマをもった街歩き用の地図を制作する。与板という街の様相を多層的に記述するとともに、地図を持って歩く人の体験をデザインすることを目指す。

前稿<sup>1)</sup>では、本PJの狙いについて詳しく述べた上で、「よいいたあやしいまっぷ」（以下「あやしいまっぷ」）、「よいいたかわいいまっぷ」（以下「かわいいまっぷ」）という2つの地図を制作した一年目（2019年10月～2020年9月）の活動を振り返った。二年目は、「よいいたきえるかんばんマップBOOK」（以下「マップBOOK」）、「与板そらカメラ」（以下「そらカメラ」）という2つの新作を完成させ、それと並行して、本PJの成果物の販売事業化も行なった。本稿では、これらの活動について報告する。

#### 2. よいたきえるかんばんマップBOOK

##### 2.1. 探究の継続

「マップBOOK」（写真1）は、与板の街角に数多く見られる「消」とだけ書かれた赤い看板（写真2）の謎に迫る、小学生向けのワークブックの体裁をとった小冊子である。

この冊子の制作のきっかけは、一年目に制作した「あやしいまっぷ」にある。与板の街にある「妖しい」雰囲気をもったものたちを収集したこの地図の最後に、「消」の看板も収められている。この看板は、防火用の何らかの道具だということは推測できる。さらに詳しい使い方や設置の経緯、今後の運命などを知りたいと、研究室1期生の伊藤崇宙君が卒業研究として取り組むことになった。

伊藤君は、「あやしいまっぷ」の発案者であると同時に、与板の「あやしい」「かわいい」ものを集めるためのイベントの企画を引っ張り、また本PJのオリジナルアニメを自主的に制作するなど、随一のアイディアマンである。そのような学生が、自ら与板で見つけたテーマを深化させていくことは、本PJにとって喜ばしいことであった。

以下、この冊子の制作過程と反響について簡単に述べる。詳細は、伊藤君の卒業論文<sup>2)</sup>と、彼が第68回デザイン学会春季発表大会で発表した梗概<sup>3)</sup>を参照いただきたい。

##### 2.2. 調査に基づく制作

伊藤君は、地元消防団の団員・元団員や消防署へのヒアリングを重ねた。看板の使い方はこうだ。まず与板の山側（西側）に存在するため池やプールなどの水を、用水路に放流する。次にこの板を用水路に差し込んで水を止める。そして溜まった水をポンプアップして消火活動を行なう。つまりこの板は、消火用の「堰板」なのである。昭和40年代頃に消防団の有志が与板町（当時）に堰板の設置を提案し、地元金物店が水路の形状に合わせた堰板を製作していったそうだ。しかし、特に与板町の長岡市編入（平成18年）後は、防火水槽や消火栓などの整備が進み、堰板やため池・プールの取水口などの管理もままならなくなり、近年は全く利用されなくなっている。街の人たちに尋ねても、長年与板に住んでいる人でさえ、堰板の使い方を知らなかったり誤認していたりすることもわかった。

堰板は与板の地形を活かした消火システムの一部を担う存在でありながら、時代の流れの中で忘れ去られつつある。しかし堰板は、その独特の意匠を伴って現在も与板に散在し、かつ形状や設置方法が一つ一つ異なる。個性的な堰板を巡って歩くことで、消火・防火の仕組みを知るやすがにもなるのではないか。そこで伊藤君は、研究成果を地図などにまとめ、世に出すことにした。ちょうど消防団員の方と、堰板のことを小学生たちに知ってもらおう街歩きをしてはどうかと話していた。彼らに向けて堰板の使い方、分布を示す地図、防火教育の意味を込めたメッセージなどを載せた、ワークブックをまとめあげた。

##### 2.3. 街の知恵を次世代に伝える

2020年11月29日に、街歩きワークショップ「消看板（きえるかんばん）の謎を解こう」を行なった（写真3）。与板在住の子ども11名と保護者7名が、集まってくださった。



写真1 よいたきえるかんばんマップBOOK



写真2 「消」と書かれた看板

そのタイトル通り、最初はその正体を明かさずに、いくつかの看板を巡ることからワークショップはスタートする。そして、この看板の役割を子どもたちに考えて発表してもらう。「ここで火事が起こると危険という意味の看板」「動物に（近くにあった）赤い木の実を食べられないようにするため」といった多様な回答。ここで初めて「マップBOOK」を配布して種明かしをすると、子どもたちは熱心に冊子をめくっていた。その後は、ため池から順に、水の流れを追って歩く。消防団員の方からの解説もいただき、堰板を用水路にはめる実演もしていただいた。

終了時のアンケートに、子どもたちはイラストも交えながらびっしりと書きこんでくれた。「消看板の工夫がすごいなと思った」といった素朴な感想の他、「もっと消看板を探したい」「町のシンボルになってほしい」という嬉しい声もあった。看板を手掛かりに、街の歴史や消火の仕組みを体感的に学ぶことのできる、密度の濃い時間になったようだ。

「あやしいまっぷ」「かわいいまっぷ」の制作の際には、多人数で与板を歩いて「あやしい」「かわいい」ものを集めた。いわば、街歩き参加者の集合知によって地図を制作した。それに対して「マップBOOK」は、伊藤君が与板の消防関係者の知を丁寧に掘り起こすことで完成した。そしてその知を次世代の子どもたちに還元し、街の新たな見方を提供することになった。伊藤君の探究は、本PJに対しても新しい方法論を投げかけてくれている。

### 3. 与板そらカメラ

#### 3.1. 制作物とコンセプト

写真4が「そらカメラ」である。与板の建物や山並みなどのシルエットが切り抜かれた7枚のカードと、全体の地図とが記された1枚のカードが、リングで綴じられている。使用者は与板の街を歩き、地図に示された地点に立ってカードを目の前に掲げる（写真5）。すると目の前の風景がカードの形とぴったりと合い、穴の向こうに空が見える。普段は見過ごしがちな街のスカイラインに視線を導き、また街と空の間の図と地の関係を反転させる仕組みである。

カード1枚目のギザギザとした妻入りの家並みや、2枚目の徳昌寺の山門こそ、与板の街の特徴的景観と言える。しかし恐竜の形をした遊具、製麺所の煙突や山並みまで、名所とは言えない日常風景も含めてモチーフを選定している。また7つの場所は、すべて訪れると与板の市街地をおおよそ1周できるような配置となっている。

ここから「そらカメラ」の制作過程や使用者の反応について述べる。こちらについても第68回デザイン学会春季発表大会で発表したもので、詳細は参照されたい<sup>4)</sup>。



写真3 「消看板の謎を解こう」の様子

#### 3.2. 制作の過程

「あやしいまっぷ」のスピンオフ作品といえる「マップBOOK」とは違って、「そらカメラ」はゼロベースで構想された。まず2020年10月16日に、研究室の2期生7名（渥美海人・飯塚武蔵・岩野郁也・勝矢夏帆・楠本彩音・重本学志・林飛良）で、フィールドワークを行なった。見つけたこと、気づいたこと、地図のテーマになりそうなことなどをフィールドノートに記し、写真に収めていく。拠点となったお寺に戻って見つけたものを報告しあい、「歴史」「小路」「空」という3つの地図のテーマを得た。

その後の話し合いで、「空」に絞ることとなった。7人は面白いスカイラインを探して何度も与板を歩く<sup>注1)</sup>。筆者も参加したが、ひたすら空を見上げて歩き、反復するかたちや、何かに見えるかたちを探し、話し合うのは新鮮な体験であった。ギザギザの中に一軒だけ丸い屋根の家があったり、建物の隙間から見える雲の流れの速さを感じたり…。

その中で、紙からシルエットを切り抜いてのぞき込むという形式も決まってきた。採用するシルエットを選び、意匠制作をして入稿し、可能な限り厚みのある紙に印刷してもらう。そして本学プロトタイピングルームのレーザーカッターでずれがないよう慎重に切り抜き、リングで留めて「そらカメラ」は完成した。

この中で意匠制作には、1期生の高橋蛍さんの助力を得た。また「カメラ」という名称は、同じく1期生の小山倅平君のアイデアである。もはや「地図」と呼べるかも疑わしいような形式のこのプロダクトを、風景をファインダーで切り取るカメラになぞらえた。

#### 3.3. 体験の共有の難しさ

「そらカメラ」のお披露目は、毎年与板のお寺の境内で



写真4 与板そらカメラ



写真5 「ヨイタと地図と歩くボク。2」の様子

行なわれる「キャンドルナイト@与板」内のイベントとして、2021年9月4日に実施した。「ヨイタと地図と歩くボク。2」というタイトルで、前年度「あやしいまっぷ」「かわいいまっぷ」で行なったイベントの続編である。

生憎の雨模様にもかかわらず、キャンドルナイトの会場である明元寺には、与板の内外から26名もの参加者が集まってくれた<sup>注2)</sup>。趣旨などの説明の後、参加者を2グループに分け、2期生の4人がガイドについて、街歩きが始まった。「そらかメラ」のシルエットを探して、与板を歩く。指定された場所に着くと、目の前にカードをかざして空を眺める。また道中で、面白い街のスカイラインを見つけたら、写真に収める。7枚のカードのうちの3つを1時間程度で巡り、元の場所に戻ってきた。

後半には雨も上がり、無事にイベントは終わった。しかし一年目のイベントと比べると、参加者の反応はやや芳しくなかった。雨という、この地図にとって厳しい条件だったことや、シルエットを街並みにピタリと合わせるのが、特に背の低い子どもには難しかったことが要因として挙げられる。ただそれ以上に、参加者に空を見ながら歩くことの楽しみが伝わりきらなかったようだ。前年度に引き続き参加いただいた、本学の小松佳代子教授と大学院生の竹本悠太郎さんが、感想をテキストで寄せてくださった。今回の街歩きは学生たちが3つのスポットを「案内」するかたちになり、「答え合わせに近い」印象だったという（竹本さん）。参加者は受け身になり、「能動的にヨイタに働きかける部分が少ない」ものになってしまった（小松教授）。

空とかたちを探し歩く、自分たちが見出したあの体験の面白さを共有するにはどのようにすればよかったのか。学生たちと振り返った。答え合わせになってしまったのは、シルエットにピタリと合わせるという地図の体裁が要因の一つであろう。またイベントの進め方としても、たとえば「そらかメラ」のカードを1枚自分でつくってみるとか（小松教授のアイデア）、商店街のギザギザのスカイラインを皆で指で追ってみるとかいった方法を考えることもできた。さらに、ひょっとして「地図」をつくる必要はなかったのかもしれない、という意見さえ出た。本PJに対して、グサリと刺さる問いかけである。我々がやりたいのは、地図をつくることなのか、与板の街歩きの楽しさを体験的に共有することなのか。後者が第一目的であれば、デザインの対象は地図に限らないのかもしれない。

三年目に向け、大事なテーマを受け取った。これが、本PJの深化の糸口になればと願っている。

## 4. 販売事業化の試み

### 4.1. 経緯と目的

本PJは2019年度から2年間、長岡市の「地域の宝磨き上げ事業」の助成金を受けて実施してきた。地図の印刷代などを拠出できる助成金は、有り難い存在である。

しかし助成金での作成分（各500部）を配りきると、それで打ち切りになってしまう。もっと多くの人に手に取ってもらい、与板を歩いてほしい。また助成金で作成したのは、無料配布しかできない。「こんなにいいもの、タダでもらっていいのですか？」と度々言っていただけが、無料で手に入れるとどうしても、そのまま家に持ち帰って

お蔵入りにしてしまう人も多いのではないだろうか。

学生たちのつくった地図を、与板を楽しむための定番ツールにしたい。活動の持続のためには、経済的に自立しなければならない。またある程度の対価を出してもらうことで、地図に愛着を持ち、しっかりと与板を歩いてほしい。以上の狙いをもって、筆者らは販売の道を模索し始めた。

助成金は、プロジェクトのスタートアップには有り難い。しかし依存体質になってしまうことや、助成金終了後の「出口」をどこに求めるのか（あるいはプロジェクトを閉じるか）ということについては、助成金事業に共通した課題であろう。特に、ものづくりを通じた地域貢献を目指す本学のような大学では、お馴染みの問題かもしれない。

以下、筆者らが設立した「YOIMAP」という任意団体の仕組みや、販売事業の実際についてまとめておく。

### 4.2. YOIMAPの活動目的と体制

大学教員としてこのような事業を立ち上げるときに悩ましいもう一つの問題が、利益相反である。大学での研究を私的な利益のために利用することは研究倫理に反し、社会の厳しい目が向けられる。筆者の大学教員としての仕事とこの事業をどのように関係づけ、またお金の流れをどのように整理すればよいだろうか。

これに関して、筆者らが作成した運営規約の一部が表1である<sup>注3)</sup>。まず本PJは、教育、研究、社会実践を目的としたものである。この3点は、大学が果たすべき使命とも一致する。大学側（筆者と学生有志。現状では北研究室メンバー）は、地図などの制作物のコンセプト立案からデータ収集、意匠デザインなどを行なう。しかし意匠はできても、それを印刷し、多くの人に与板を歩いてもらって反応を確かめなければ、教育としても研究としても、社会実践としても完結しない。そこで、YOIMAPの出番となる。YOIMAPは地図の印刷と加工、販売などを行なうことで、本PJの教育、研究、社会実践を支援する、収益を目的としない任意団体である。そしてヨイタタンサケイカクとは、大学とYOIMAPとで行なう活動の総称である。

代表には、与板でお茶の販売を営む田中洋介氏に就いていただいた。本PJの立ち上げ時から、助成金関係の手続きやイベント実施などあらゆる面で尽力いただいている人物である。筆者も、大学とYOIMAPのつなぎ役を担うため「共同代表」として名を連ねる。そして役員以外に「運営メンバー」を設け、本PJに関わってくださっている与板の方、卒業生（前述の1期生伊藤君）や現役学生（大学院に進んだ前述の小山君）に加わってもらった。

役員2名は、YOIMAPから報酬を受け取らないことを運営規約に定めている。YOIMAPがいくら売り上げようが、筆者の懐には収入がこない。なお初期投資のほとんどは、役員2名の持ち出しである。売上は初期投資の回収と、次の地図の印刷費などに充てられる。

### 4.3. 知的財産権の扱い

学生との関係において大事なのが、知的財産権の扱いである。いくらYOIMAPが利潤を上げることを目的としていないとはいえ、学生の知的財産の成果を勝手に利用するわけにはいかない。これに関しては、表2のような取り決めをYOIMAPと学生・卒業生との間で交わすことにした。

1)に記載しているように、この取り決めはYOIMAP



表1 YOIMAPの運営規約（一部。2021年9月現在）

2)	「ヨイタタンサケイカク」と本団体の活動
✓	「ヨイタタンサケイカク」とは、本団体と長岡造形大学の有志学生メンバーとの共同プロジェクトの呼称である。
✓	「ヨイタタンサケイカク」では、まず長岡造形大学の有志学生メンバーが、北雄介助教の監修の下で、長岡市与板町（以下「与板」）において、街歩き用の地図などの制作物（以下「制作物」）の意匠デザインを行なう。次にその意匠に基づいて、本団体が制作物を印刷・加工し、店舗などを通じて販売する。
3)	「ヨイタタンサケイカク」の活動目的
✓	教育：長岡造形大学の学生が、フィールドワークによって街の魅力を発掘し、パリエティに富む独自の制作物をつくり、それを販売し、ユーザーの反応を得るまでの一連の過程を通じて、デザインに必須の観察力、発想力、発信力、情報リテラシーを養う。
✓	研究：都市・地域の雰囲気や様相を可視化する方法論の開発と、制作物の普及を通じた地域社会や街歩き体験の変化などについて、長岡造形大学の学生および北雄介助教が、学術研究を行なう。研究成果は論文などのかたちで、広く社会に公表する。
✓	社会実践：学生の制作活動の成果を、社会に還元する。与板を、多くの人が訪れる、歩いて楽しい街にするために、制作物を役立てる。
4)	本団体の活動目的
✓	制作物の印刷・加工・販売を通じて、「ヨイタタンサケイカク」の教育・研究・社会実践活動が継続的に行なえるよう支援する。

表2 学生らと交わした知的財産権についての取り決め(2021年9月現在)

1)	本取り決めについて
✓	この取り決めは「ヨイタタンサケイカク」において、任意団体 YOIMAP と、地図などの制作物（以下「制作物」）の意匠制作を行なった長岡造形大学の学生または卒業生（以下「制作者」）との合意の上に定める。
2)	知的財産権の帰属
✓	制作物の知的財産権は、制作者に帰属する。
3)	知的財産の使用および改変
✓	YOIMAP は制作者の許諾の下で、知的財産を使用することができる。
✓	知的財産を YOIMAP が改変する場合には、制作者に承認を得る。
4)	知的財産の使用料
✓	知的財産の使用料を、売上げに対する一定の掛け率により算出し、会計年度ごとに、YOIMAP から制作者に支払う。
✓	知的財産権を有する制作者と、売上げに対する使用料の掛け率は、制作物ごとに個別に定める。

で一方向的に決めたわけではなく、知的財産権を有する研究室1期生との相談の上で定めた。特に知的財産の使用料については、一定額を一度きりで支払う「買い切り」案ではなく、会計年度ごとの支払いを彼ら自身が選択した。1年間での使用料など微々たるもののはずだが、卒業生に継続的に関心をもってもらえる仕組みにもなると思う。

#### 4.4.2 2つの地図の販売の開始

以上の枠組みを定めた上で2021年4月1日にYOIMAPを設立した。そして同9月から、助成金で作成した500部をほぼ配布しきった「あやしいまっぷ」「かわいいまっぷ」の販売を始めた<sup>注4)</sup>。主に、与板町内の店舗に置いていただいている。いずれも本PJの開始段階から関心を寄せて、会場提供や助言などをいただいている店舗ばかりだ。これらの店舗で地図を入手し、じっくりと街を歩いてもらいたい。また与板の方のご縁で、JR新潟駅に付属する商業施設内でも販売できることとなった。県の玄関口である新潟駅で、与板という小さな街の妙な地図を偶然手に取り、それを機に与板を訪れてもらえればと思っている。同じ狙いで、インターネットショップも設けることにした。

多くの街では、名所旧跡や地域の歴史といった、社会的に価値が認められた情報が掲載された地図が、無料で配布されている。一方で与板では、「あやしい」や「かわいい」という、一見何の価値もなさそうで、しかしどこか気を惹かれる不思議な情報が載った地図が、販売されている。果たしてこれが来街者にどう受け入れられ、街歩き体験や与板の街をどう変えていくのか。本稿は販売開始直後に執筆しているため、まだ反応はわからないが、非常に楽しみである。

#### 5. まとめと今後の展望

街歩きイベントや販売事業化の動きにおいて、多くの方

に参加・賛同いただいているのは、学生たちの創作力の賜だと感じている。一方で、学生が代替わりし、助成金も終了する中で、プロジェクトをいかに継続・発展させていくかは難しい問題でもあった。筆者や田中氏のような存在がある程度汗をかきながら、学生たちや与板の方々との議論を継続したい。「そらカメラ」の振り返りから受け取ったテーマについても、じっくり考えていきたい。

#### 謝辞

YOIMAPの仕組みづくりにあたっては、本学の鈴木均治教授、吉川賢一郎准教授、福本墨助教、事務局の内山健史氏の助言をいただきました。また「そらカメラ」の加工においては、プロトタイプングルームの佐藤成行氏に技術協力をいただきました。記して感謝します。

#### 注釈

注1) 一年目には地図のテーマ決定の後、30名近くの学生で「あやしい」「かわいい」を徹底的に探すイベントを実施し、地図に掲載するデータを集めた。しかし二年目はコロナ禍で、大学からのバス移動を伴うイベントは開催できず、データ収集は研究室メンバーだけで行なうことになった。イベントという区切りがなくなったことも含め、制作上の痛手であった。

注2) このイベントでは「マップBOOK」を用いた街歩き（1グループ）も行なったが、2章で述べた2020年11月のイベントの方が詳細な記録が得られているため、本稿では割愛する。参加者26名は「マップBOOK」参加者も含めた数字である。

注3) 運営規約の全文は本PJのwebで公開している。<https://yoitatan sakeikaku.net/>（2021/9/27確認）

注4) 助成金事業時と同じく500部を印刷し、加工作業（「あやしいまっぷ」を巻く作業、「かわいいまっぷ」を折る作業など）の一部を「長岡地域若者サポートステーション」様に無償で引き受けていただいた。職のない若者の自立を促すため、社会的意義のある作業を請け負う事業をされており、YOIMAPにとっても非常にありがたいものであった。残りの作業は、本学の学生にアルバイトを募集して一気に終えた。

#### 参考文献

- 1) 北雄介：ヨイタタンサケイカクの一年目，長岡造形大学研究紀要，vol.18, pp.90-93, 2021.
- 2) 伊藤崇宙：消えゆく看板を追って 一長岡市与板町の消火活動用せき板と人々の認識についての研究一，長岡造形大学卒業論文，2021.
- 3) 伊藤崇宙・北雄介：消えゆく看板を追って 長岡市与板町の消火活動用せき板と人々の認識についての研究，日本デザイン学会第68回春季研究発表大会概要集，pp.130-131, 2021.
- 4) 北雄介他：街の空を切り取る「与板そらカメラ」とその制作意図，日本デザイン学会第68回春季研究発表大会概要集，pp.128-129, 2021.